

## (十六) 猫の扉

大きなペットセンターに行くと、犬猫専用の小さな枠付きの扉を売っている。大きさが3種類あり、それぞれ大型犬、中型犬、小型犬兼猫用である。家の壁や扉の、ここと決めたところを割（く）り抜き、枠をはめこむ。枠の上の部分には蝶番（ちようつがい）がついていて、透明な扉は押されるとパタンと開いた後でパタンと閉じ、犬や猫だけが通り抜けられる。

通称「パタパタ」（この家だけの通称かもしれないが）。

女房の父親が同居に来た時、家を建て増したついでに、台所の勝手口の向こうを3畳ほどの土間にした。今時の家で土間があるところは少ない。が、鍬（くわ）や剪定鋏（せんていばさみ）、野良着や雨合羽（あまがっぱ）などの庭仕事用品だけでなく、収穫したじゃが芋や箱買いの缶ビール、大量に買った林檎（りんご）、自家製の白菜漬、さらにはストーブ用の石油缶を保管するのに、低温の土間はきわめて便利である。

この夫婦の家では、それまで猫の餌皿とトイレを玄関の土間の隅に置いていた。

十数年前のある日、家族で出かけようとする、歩き始めたばかりの次男が玄関の土間に猫と並んでしゃがんでいた。女房が次男の名を呼ぶと、振り返った口がモグモグ動き、頬には猫の餌がくっついていて、息子は大好きな「ニャンニャン」のドライフードと一緒に食べていたのである。

夫婦はあれま、と吹き出したが、その後次男は腹をこわしたようでもなかったのほうっておいた。その時1歳の次男の上には3歳の長女と5歳の長男がいたうえに、女房の腹の中には次女がいた。少しぐらいのことでオタオタしていた日には、とても毎日子育てをしていける状況ではなかったのだ。

が、その後はさすがに、子どもの目の前では猫に餌をやらないようにした。

その次男ももう大きくなったが、猫用スペースは表口の玄関より裏口の土間のほうがいい。

それに、猫は家の外と中をなるべく自由に行き来させたい。猫派の夫婦としては、猫の自由は大切なものだったから。

建て増しをする大工さんに頼んで、土間と台所の間の壁と、土間と外との間の壁の2カ所に猫用のパタパタ扉をつけてもらう。年配の棟梁も猫の扉は生まれて初めて見たらしく、無言でしばらくの間目をパチパチさせていたが、チャンと上手につけてくれた。

猫の扉の枠の下にはダイヤル式の留め具がついていて、扉が、「中からだけ開く」、「外からだけ開く」、「どちらからも開かない」、「どちらからも開く」のどれかに設定できる。さらにこの留め具は乾電池につながっていて、閉まっている時でも磁石に反応して開く仕掛けである。磁石は猫の首輪につける。つまり、ウチの猫だけ出入り自由で、ヨソの猫は入れない。

なんて賢い仕掛け！

こんな器用なものをつくるのは日本の会社かと思ったら、表示はすべて英語で、輸入物だった。そういえばアメリカでもイタリアでも、夫婦は友人の家の居間でシェパード級の大型犬を見かけることがあった。家中土足で歩く習慣だと、犬を中に入れるのにも抵抗が少ないんだろう。それに伝統的な牧畜社会だと、羊の世話をする犬（シェパード）が家族の身近に暮らしていたんだろうね。

この家の代々の猫は、教えるとじきにパタパタ扉の仕組みを覚えた。

夫婦は、わりに性質がおとなしい雌猫を飼うことにしている。しかし、「性質がおとなしい」ということは、「弱っちい」ということでもある。イタリアで飼っていたトラなんぞは、近所のベルギー人が飼っていたミルコという老猫が来ると、イチョマエに背中の中毛を立ててフーッとうなりながらも、1歩、2歩、と後ろに下がっていた。

うなるか、後ずさりするか、どっちか一方にしてよ！

そのほかの代々の猫も例外なく気が弱い。

初代のミー、マー、ムーから始まって、ジジも、タマも、トラも、そしてラッテ

とチョコ、現在の桃に至るまで、みんな弱っちい。気の強いヨソの猫が侵入して自分の餌を食べるのを、黙って傍に座って見ている。迫力負けしたか、実力行使で負けた後か。

「あんた情けないわね、あんたのごはんが眼の前で食べられてんのよ？ 追い出しなさいよ」と夫婦が猫の首をつかまえて説教を垂れてもムダである。

でも、この猫の扉さえあれば、無敵。

もう大丈夫！

確かに、1年ほどは大丈夫だった。

が、猫の扉の箱型乾電池は数カ月で切れ、かがんで取り換えるのがけっこう面倒である。おまけに、喧嘩に負けて逃げてきた、この家の猫の尻尾のすぐ後ろにヨソの猫がくっついて追っかけてきた場合は、ヨソの猫も一緒に猫の扉をくぐり抜けてしまう。

マメではない夫婦は、猫の扉を中からだけ開くようにし、乾電池と磁石の仕掛けを諦めた。

猫が入りたい時はニャンと鳴くから居間のガラス戸から入れてやる。

が、ある日、女房は目を疑った。

ついさっきまで外にいた筈の桃が、音もなく中にいるではないか。

一度なら見まちがいかと首をひねって終わりだが、数度続いた。

ひと月ほどたつうち、とうとう女房は、桃が外から猫の扉の端にカリカリと爪をかけ、器用に開けて頭を突っこんで入る姿を目撃した。

猫は「手」を使う、犬は使わない、とは動物博士のムツゴロウ、畑正憲さんも言っている。

「桃ちゃん、器用ねえ、お利口」と亭主は桃を抱き上げて褒めてやる。

「これであんただけ自由に出入りできる」

しかし、猫は「手を使う」だけでなく、「他の猫の行動を見て学習する」動物で

もあることが判明した。

ただしこの場合は、桃ではない別の猫である。

朝女房が台所へ降りてみると、亭主が「梅の花」と呼ぶ猫の足跡が流しの縁に点々とついている。次男の弁当用にと皿に入れてフタをしておいた焼肉や、鍋の中の筑前煮の残りまでもが見事に消えている。

桃はふだん流しには上がらないから、これは別の盗人猫の仕業（しわざ）だ。

前から桃の餌を食べていた、「薄茶の縞（しま）模様でまん丸の短い尻尾にタマ2つくっつけた」雄猫がある朝屋根裏の3階から降りてきて、起きたばかりの亭主と鉢合わせし、双方仰天した。

コイツめ。

その結果、よくできた仕掛けの筈の猫の扉は締め切られ、桃はガラス戸の傍で鳴いては出入りすることとなった。

なかなか万能の仕掛けはない。

亭主は桃の「両手」を持って、「さあ猫背を直しましょう」と言いながら、一緒に腹筋運動をしている。

猫が人間に飼われるにも、それなりの苦労があるというものだ。

